



神奈川県におけるミナミウラジロチコグサとキタウラジロチコグサ

会長 勝山輝男

これまでウラジロチコグサ *Gamochaeta coarctata* (Willd.) Kerg. は 1 種として記録されてきた。しかし、2019 年に出版された『岐阜県植物誌』では南アメリカ原産の *G. coarctata* と北アメリカ原産の *G. chinoesthes* Nesom の 2 種に分けられた。ウラジロチコグサとして最初に記録された植物がどちらか不明のため、混乱を避けるために「ウラジロチコグサ」は使用せず、和名は原産地にちなんで *G. coarctata* はミナミウラジロチコグサ、*G. chinoesthe* はキタウラジロチコグサとされた(高橋, 2019; 高橋, 2020)。その後、*G. coarctata* は *G. americana* (Mill.) Wedd と区別できないことから、YList(米倉・梶田 2003-) や浅井 (2025) ではミナミウラジロチコグサの学名は *G. americana* に変更されている。

ウラジロチコグサが国内に帰化して増加した時期はちょうど『神奈川県植物誌 1988』の調査が始まった頃に一致する。大場 (1986) がシハコグサ属 *Gnaphalium* の『神奈川県植物誌 1988』のサンプル版として書いたものに 1986 年時点での分布図が掲載されているが、すでに横浜市など神奈川県東部の市街地には多くの分布点が打たれている。そこで、神奈川県立生命の星・地球博物館 (KPM) に収蔵されているウラジロチコグサ標本をミナミウラジロチコグサとキタウラジロチコグサに分け、神奈川県内の分布状況の変遷を調べてみた。まず、両者の区別であるが、高橋 (2019, 2020) は以下のように分けている。

ミナミウラジロチコグサ: 葉の表面は無毛かときに中肋沿いに細かなクモ毛がある。総苞の外片は卵形から広卵形で先は鈍形かときに鋭形、中片は長楕円形で先は鈍形、内片は線状長楕円形で先はやや横に丸く張り出してから微凸型に終わる。瘦果は淡黄褐色。

キタウラジロチコグサ: 葉の表面は通常クモ毛が薄くある。総苞の外片は卵形、先は通常鋭形、中片と内片は長楕円形で先は鋭形から鋭尖形。瘦果は紫色。

総苞片の形は微妙なので、葉の表面のクモ毛の有無と瘦果の色を指標に分類してみた。結果は表 1 のようになった。神奈川県では『神奈川県植物誌 1988』調査時 (1979-

1987)、『同 2001』調査時 (1988-2000)、『同 2018』調査時 (2001 年以降) を通じて、標本数はミナミウラジロチコグサがキタウラジロチコグサよりも多かった。岐阜県 (高橋, 2020) ではキタウラジロチコグサが多いので、逆の結果となった。神奈川県産のもっとも古い標本は 1974 年の横浜市港南区日野 (伊達建夫 KPM-NA0056581) でミナミウラジロチコグサであった。キタウラジロチコグサのもっとも古い標本は 1981 年の横浜市鶴見区大黒ふ頭 (森茂弥 KPM-NA1078336) であった。神奈川県最初の記録はミナミウラジロチコグサであるが、全国的にはどちらが先かこれだけでは判断できない。

県外標本は 13 シートあり、ミナミウラジロチコグサが 7 点、キタウラジロチコグサが 6 点あった。特筆すべきものとしては、2008 年の伊豆諸島青ヶ島 (勝山輝男 KPM-NA0132115) と 2011 年の伊豆諸島御蔵島 (勝山輝男 KPM-NA0200065) がいずれもキタウラジロチコグサであった。

表 1. KPM 収蔵のウラジロチコグサ類の採集年代別の標本数

	ミナミ…	キタ…	不明
1978 年以前	1	0	0
1979-1987	44	10	2
1988-2000	42	15	0
2001 年以降	32	6	1

文 献

- 浅井元朗, 2025. ウラジロチコグサ類. 植調, 58 (10): 354-356.
大場達之, 1986. FLORA KANAGAWA, (22): 175-178.
高橋 弘, 2019. チチコグサモドキ属, 岐阜県植物調査会編, 岐阜県植物誌, pp. 790-791. 文一総合出版, 東京.
高橋 弘, 2020. 岐阜県植物誌で用いたキタウラジロチコグサとミナミウラジロチコグサ (キク科チチコグサモドキ属). 植物地理・分類研究, 68 (2): 99-102.
米倉浩司・梶田忠 (2003-) 「BG Plants 和名一学名インデックス」 (YList), <http://ylist.info> (2025.6.22)